氏名	高 田 英 一
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博乙第３６９６号
学位授与の日付	平成１４年３月２５日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 （学位規則第４条第２項該当）
学位論文題目	Natural history of lumbar disc hernia with radicular leg pain: Spontaneous MRI changes of the herniated mass and correlation with clinical outcome （下肢神経根痛を伴う腰椎椎間板ヘルニアの自然経過の検討：MRIにおけるヘルニア腫瘤の自然経過と臨床症状との関係）
論文審査委員	教授　平木 祥夫　教授　大本 堯史　教授　清水 信義

学位論文内容の要旨

過去において腰椎椎間板ヘルニアに対しては多数の観血的加療が行われてきた。しかし自然治癒する症例の存在が明らかとなり、我々も保存的に加療することが多くなってきている。本研究では、腰椎椎間板ヘルニアの予後を正確に予測する目的で、MRIによるヘルニア腫瘤の形態学的変化、及びその臨床症状との比較検討を行った。

42 例の腰椎椎間板ヘルニア患者に対し３ヶ月ごとに MRI を撮像し、その臨床症状を腰椎疾患治療成績判定基準を用いて評価した。MRI よりヘルニアを３タイプ（ Protrusion ,Extrusion ,Sequestration ）に分類し、それぞれにおける縮小期間、臨床症状について検討した。Sequestration , Extrusion , Protrusion の順番で縮小する傾向にあり、Protrusion のうち若年者の巨大な中央型のヘルニアに関しては縮小を認めなかった。非縮小例の一部に臨床症状の改善を認めなかったが、残る症例には全例改善を認めた。臨床症状の改善はヘルニア縮小に先行していた。

今回の研究により次のことが明らかとなった。1）ヘルニア腫瘤は若年者の巨大な中央型の Protrusion type でなければ全例縮小し、臨床症状も改善する。2）腫瘤の縮小と臨床症状の改善には関係があり、臨床症状の改善は縮小に先行する。3）腫瘤の縮小、臨床症状の改善の経過は、ヘルニアの type により異なる。

我々は、上記事実を踏まえ、本疾患に対し予後を初診時の MRI により予測でき、医学的合理性をもってその治療方針、適応を決定できると考える。

論文審査結果の要旨

本研究は、腰椎椎間板ヘルニア42例についてMRIによるヘルニア腫瘤の形態学的変化とその臨床症状を３ヶ月ごとに比較検討した臨床的研究である。その結果、1）ヘルニア腫瘤は若年者の巨大な中央型のProtrusion typeでなければ全例縮小し、臨床症状も改善すること、2）腫瘤の縮小と臨床症状の改善には関係があり、臨床症状の改善は縮小に先行すること、3）腫瘤の縮小、臨床症状の改善の経過は、ヘルニアのtypeにより異なること、を明らかにしている。

これらは、本疾患のMRIによる予後予測と治療方針の決定に関して重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。